

---

# その日がきたら忘れてくれよ

バルル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

その日がきたら忘れてくれよ

### 【Nコード】

N4168U

### 【作者名】

バルル

### 【あらすじ】

なんとなく書いたにしては…長くなっただけど短編です。割合、ほのぼのとした感じになったと思いますが…ボーイズラブって時点でR15なんでしょうか…初っ端からそれっぽいで苦手な人は決して読まないください。あらすじは…学生の葛藤です。

(やばいって解ってるこんな気持ち…絶対やばいって…)

俺は隣を歩く園田の横顔をちらりと見た。園田って奴は、いかにも育ちの良いお坊っちゃん…俺とはたまたま同級生なだけで…たまたま隣の席で…たまたま帰る方向が同じで…本当にたまたま…本の趣味とか、テレビの話とか、好きな教科とかが似てて…何と云うか一緒にいてこんなにしくりくる奴に出会ったのは初めてで…しかも顔とか背恰好とか同性の俺から見ても、好感がもてるっていうか、ハーフみたいな綺麗な顔立ちにストレートの真っ黒な髪の毛がいかにも上流階級の産まれて感じて品が溢れ出ているなんて言うか…何て言うか…

(やばいだろ!!こんな気持ち!!)

俺は髪の毛を掻き篦りたい衝動にかられ、園田から目を逸らした。だってそうだろ?やばいだろ…いくらこいつに好感がもてるからって、こ…こいつを…綺麗とか可愛いとか完全なホの字目線で見るのはどう考えたってヤバイだろ…駄目だ俺、しっかりしろ…駄目だつて。

心の中の葛藤むなしく、また俺はいつい園田の横顔を盗み見る。何だってこいつはこんな綺麗な顔してんだ…なんだってこいつは傍にいると無性に触りたくなるような気分俺をさせるんだ…いや、別にこいつがさせてる訳じゃないけど、茶っこい大きい賢そうな瞳とか、長めのサラサラの前髪とかさ、目に付くってか、つい触れたくなるだろ…風が吹くと、細い髪がさらっと揺れてさ良い香りがし

たりするんだ…だから！そういう思考が駄目だって言ってるんだろバカだな俺は…

「なあ、染谷…今日うち寄ってかない？」

「ぬわっ…ええ”？あ…ああ。うん…いいのか？」

「何びつくりしてんだよ、おかしな奴だなあ」

「すまん、考え事してたから」

「へえ…染谷が考え事ねえ。何考えてたんだよ？」

「な…何って、別に言う程の事じゃねえよ。それより、良いのかお前今日塾じゃねえの？」

「ん…今日は休む。親いないんだ、お前暇なら泊まってけよ」

「え”…あゝ、うん。暇…」

(おいおいおいおいおい…いいのか？大丈夫か？俺っ！！)

「そっか、良かった」

(ぐはっ！！そんな可愛い笑顔俺に向けるなバカ…)

駄目だ…俺たぶん今日こいつに何かしちやいそうだ。も、もう認めるか？真正ホモか俺？でも、こんな気持ちになったのこいつが初めてだぞ…それでもホモはホモだよな。初恋は佳子ちゃんだったのに…どこで路線を間違えたんだ？男子校じゃねえし、それなりに女友

達だっているのに…何だつて俺はこいつの一挙一動にビクついてんだか。

でも、やべえ…むちゃくちや家に誘われて嬉しいんですけど…。こいつの部屋初めて見るし…めっちゃドキドキしてきたぞ。はっ！！私服っ！！家に帰ったら私服に着替えるんじゃないか？おいおいおい…どんな私服きるんだよ…まさかまさかまさかの和服とか？ぎゃふっ…萌え死にするだろそんなんつて、やめろよその思考。

はあはあ…

駄目だ、鼻血でるぞ…意識を逸らせねえと。

「お前の家つて、柏だっけ？」

「うん。北のほうだけどね。駅から徒歩10分つてとこかな」

「へ～そんな近いのか、便利だな。俺んち徒歩20分くらいあるから毎日チャリだぜ。家買う時はさ～やつぱ駅近じゃねえと駄目だよな。うちの親、ほんと何にも考えてねえから…可愛い外観が気に入ったから買ったとかさ…馬鹿みたいだよ。高いローン組んでさ…高校は公立に行けとかまじうぜえ。お前んちは金持ちだから良いよな」

「ん～でも、うち親、仲良くないし。家族皆揃ってご飯食べたのなんかもう5年くらいないかも。馬鹿でもお前んちは仲良いだろ？兄妹もいるし…楽しそうじゃん？」

「まあ…仲は悪くはねえけど、兄妹5人もいるとうぜえぞ。まじ公立いかなきゃなと思うもんな」

「ふふ…頑張つて勉強しなきゃね。お兄ちゃんは辛いね」

そう言つて、園田はくすくす笑うんだ。そんな時の園田の笑顔は本当に可愛くて…俺はもうどうにもこうにも園田が好きだつて思い知るんだ。空気が澄んで、胸がきゆうつと苦しくなつて、ずっと園田を見ていたい衝動と、そんな思考が園田を汚してるみたいで辛くなる。何だつて俺はこいつに恋なんかしたんだろう…なんだつてこいつでなければいけないだろう。友達で居たいのに…きつと俺はこいつに好きな人ができたら目茶苦茶嫉妬する。応援なんてできないくらい嫉妬する。友達でいれない…

いつかそんな日がきたら…泣く…かな…。

俺はまだ、中学3年生で…進路とか夢とか勉強の事とか考えなきゃいけない事沢山あつて…男を好きだなんて複雑すぎて受け入れられなくてただそつと見てるくらいの勇氣しかなくて。今こうして傍に居られて話ができ俺の傍で笑つてくれる…それだけで凄く幸せで…これ以上求めちゃだめだつて解つてるのに、怖いんだ。沸き上がる独占欲でだんだんこいつと居るのが辛くて、見ている目線だつていつかバレんじゃないかつて内心ビクビクだ。

それでも…どうしようもなく…

絶対に声に出せない言葉つてあるんだな。出したら終わりだ。こいつに嫌われたら心が潰れちまう。だつて両想いになんか絶対なれない事解りきつてるもんな。解つてる、解つていますとも。だから、家に泊まるくらいいいだろ。親友でいられる日までは、傍にいていいだろ。良いはずだ。良いに決まつてる。だつて…そのうち…きつと…別れなんかすぐ来るんだ。

こいつモテるし。俺だって告白くらいされた事あるけどさ、こいつ  
ってば、合唱コンクールでピアノとか伴奏したりするもんだから…  
女子どものハートの目がワンサカワンサカ。はあ…俺の想いなんか  
クソだよクソ。せめて女だったらなんて考えて俺はげんなりした。

「ここだよ。俺んち」

「お、いい家だな。門からして普通じゃねえな。セコムはいつて  
るか？」

「あはは。はいってる。親が契約してた」

「この家は入らなきゃダメだろ。俺んちは入る必要まったくねえけ  
どな」

「何だよそれ。親に怒られるぞ。俺の部屋、三階だから上がって」

「おお」

玄関を入ると高そうな壺や、絵が飾ってあって、いかにも金持ちな  
雰囲気醸し出している。純和風ではないけどランク高そうな木目  
の柱、杉の良い香り。スリッパをはく園田の姿とか…上品すぎる。  
吹き抜けの灯りが階段を照らしているから、電気とか付ける必要な  
いし。内庭みたいなのが奥にあって森の中の家みたい。は、贅沢な  
つくりだなおい。大人になったらこんな洒落た家建ててみたいよな  
あ。無理だと思っがさあ。

階段を園田について上がると広いリビングみたいのがあって、そ  
の奥に扉があった。

「三階に親来ないんだけどね。一応個室あるんだ」

「かゝ羨ましい。すげえな」

「ん…ま、警沢だよな」

「まじ、いつしよに住みてえ」

「染谷うちの子になつたら楽しいだろな。兄弟だつたら良かったよな…俺達」

「ああ…うん」

(やべ…俺赤面してないかな)

「そこ、座つてて。雑誌とか読んでて良いから。俺、ジュースとつてくる」

「おお。さんきゅ」

俺は、部屋の中央にある真っ白なソファに腰掛けた。もふつと、包み込まれるような柔らかさ。高い。これは間違いなく高いソファだ。大理石の机の上に無造作に置いてある雑誌をしてみる。あ、これ読んでみたいと思つてたやつだ…さすが園田、どこまでも気が合うぜ。俺は鼻歌何かを歌いだしたい気分で、ぱらぱらと雑誌をめくつた。ぱらつと、何か写真みたいなのが落ちた。

「ん?」

拾ってみると、それは一年の時の遠足の写真…まじまじ見てしまっ  
たが、俺の写真だ。え〜っと、どういう事だ？なんで？園田と俺は  
3年になって初めて同じクラスになったはずだから、一年の時は俺  
の事なんて知らないはずだよな…ん〜。

「あつー！」

階段を登ってきた園田が奇声をあげた。手にはお盆に乗せたオレン  
ジジュース…、こぼれそうな勢いで園田が迫ってきた。

「だめだ…見た？」

「う…うん。俺じゃん？」

真っ赤に赤面した園田はおろろとした様子で、とりあえずお盆とジ  
ュースを机に置いた。指先が震えてる気がするの…俺の目の錯覚  
か。なんだよ、なんでそんな動揺すんだよ…おい、お前が普通にし  
てくれないと俺は理性たもてねえぞ…しっかりガードしろよ園田  
っ！！

「な…なんだよ、写真くらい良いじゃねえか。これ、遠足の時のだ  
ろ？」

気を使って、喋ってるのに、園田は益々顔を赤くするもんだから、  
俺もなんだか恥ずかしくなってきた…目を合わせられず、写真をガ  
ン見する。

「ごめん…俺…染谷の写真…」

「あ、もしかして俺にくれようと思ってたのか？さ、さんきゅな」

「え？あ…うん。そう、実はそれ、番号間違えて買っちゃってさ…  
そういえば渋谷の写真だったなって思って雑誌に挟んで忘れてたみ  
たい…ははは」

「なんだ、そつか。おま、びっくりするじゃん…見たらいけなかつ  
たかと思っただぜ」

「あははは…」

妙に乾いた笑いで何とか気まずい雰囲気を作りすぎた俺達は、無  
言でオレンジジュースをすすった。ってか、園田の赤い顔なんて初  
めてみたんですけど…やばいっしょ、可愛すぎるっしょ…あゝもゝ  
人の気しらんと…俺は嬉しさのあまり頬がひくひく動くのをなんと  
か止めるので必死になってた。

「そついやさ、クラスに斎藤由紀子っているじゃん？」

「え？由紀子…ああ。由紀子がどうした？」

「染谷…仲良いよね…」

「ああ、まあ。一年の時からずっと同じクラスだからなあ」

「そつなんだ…へゝ」

（なんだよ？なんで由紀子の事なんか気にするんだ？）

まさか、まさかまさかまさか…園田、由紀子の事が好きなのか？い  
や、でもあいつガサツだし頭もそんなに良くないし、顔も平凡な感

じだし…園田にはこれっぽっちも似合わないぞ。ま、俺よりは似合うけどさ…けどさ…趣味悪いいだろ、ないだろ…あるのか？まじで…え…まじか…

ぐるぐる混乱し始めた俺はつい、聞いてしまった。

「おまえ…由紀子が好きなの？」

「ええ”っ！！”」

園田は声を裏返して動揺した。まじですか…好きなんですか？園田が？本当に？はあ…まじか。おいおい、失恋か？せつかく楽しいお泊りだったのに…これじゃタダの拷問じゃねえか。なんだよ園田…まともな恋愛なんかしやがって…くそ…。

「ま、由紀子は悪い奴じゃないからな…いいんじゃないかね？」

「染谷が…好きなんじゃないの？」

「ああ？俺が？あほか…」

「本当に？俺、てつきり両思いなのかと思ってた」

何言っただよ、俺が好きなのはお前だ…つうの！言わないけど。なんだよ、俺が由紀子が好きだったら諦めるつもりだったのか？諦めてくれるのかな？好きって言うってみるか…いやいやいや、駄目だ。ややこしくなるだけだ。仮に、俺が由紀子が好きだから諦めるってなつて、園田が諦めたとして…万が一俺が園田に告白するとなつたら由紀子はどうなつたって話に絶対なるだろ…駄目だ、面倒だ。でも、この場合好きって言わないと園田は由紀子とくつつくのか？

それはそれで嫌だぞ…相手が由紀子だけに何て言うか諦めつかねえぞ…ごめん由紀子…お前は良い奴なんだが、園田とはあわねえんだって…

「染谷は…今、好きなやついるの？」

「ええ？俺…う、な…なんだよ修学旅行みたいなノリだな…はっはは…」

「いるの？」

「い…いるような…いないような…いるかな…」

「なんだよ、はっきりしないな」

「お前、お前の話が先だろ…由紀子に告白する気なのか？」

「は？しないよ。好きじゃねえし…」

「なぐんだよ、好きじゃねえの？なんだ…そっか」

ほ、ほほ良かった。良かったぞ。何だよ動揺しちまたじゃねえか。あぶねえ。聞いてよかった。はっ！！でもまだこいつの好きなやついるのか聞いてねえし…き、聞いてみるか？いや…いたらいたで敵しいぞ。でももうはつきりさせたい。

「じゃ、お前の好きなやつって誰だよ？」

「え…」

園田はその綺麗な瞳をびつくりしたみたいに見開いてぱつと、手で口元を押えて目を逸らした。なんてなまっちろい指してんだか…可愛い手だな、おい。いや、なんでテレんの？つて、ぎくくっ！！馬鹿そんな流し眼で俺を見るな！！おまつ、どんだけ自力あるんだよ…おおおい、よよよよく考えたら二人っきりでソファなんか座つて…ちよ…う…まずい…

「あ、あの…そのだ、トイレどこ？」

「え…ああ、廊下出て左…」

「そか、借りるな」

すまん…園田。まじで俺最低で涙でてきた。でも、お前が悪いんだぞ…そんな目で俺をみるから。と、とにかく…トイレに行つて落ち着かせないと。生唾をぐくりと飲み込んで俺はトイレに足早に向かった。トイレの個室に入って扉を閉めて…はあ…と重いため息を吐く。はっ！…と…といれっ！！園田がいつもピーとかしてるトイレ！！ぐはっ…落ちつかねえ！！まずいまずい…あんまりこもつてたらウン〇してると思われる…早く、早く萎えろつて…馬鹿息子。はあはあ…

ずくずく…ん…、ごめん…園田…俺最低です…出しちゃった。ああもう泣きたい。おれホモだ…あはは…がちホモだ。あ…なんか学びの多い一日だな今日は…あはは…

どんよりした面持ちで、リビングに戻るとまだ少し顔を赤らめたままの園田がふり返った。いたたまれない…不自然に目を逸らして、ソファに座る。ま、やっちまったもんは仕方ねえ。ちゃんと流したし…

オレンジジュースに手を伸ばして、ごくごく飲む。喉が渴いてしかたねえつつうの。ちらっと、時計をみると6時が過ぎた頃だった。

「なんか食つっ？」

「あ、出前とろっか…ピザか、寿司か…うどん？」

「うどん？うどんなんか取れるのか？ラーメンだろ？」

「え？ラーメン…とった事ないけど…あ、チラシないや」

「いつも何とってんの？」

「寿司が多いけど…寿司で良い？」

「ああ、俺は何でも…寿司好きだし」

「そっか、じゃ電話してくるよ」

「おお。悪いな…半分払うから」

「いいよ、そんな…おごらせてよ。染谷…今日誕生日じゃん？」

「え？あ〜〜忘れてた」

「馬鹿、女子が騒いでたぞ…お前に誕生日プレゼント渡すとか渡さないとか…」

「貰ってねえし…てか、貰わないよ…返すのめんどいじゃん」

「…あ、お返しとかはいらないから…」

「え？あ、いや…お前からは嬉しいぜ、ありがとな。お前は誕生日  
いつだっけ？」

「まだまだ先だよ、12月3日だもん」

「そっか12月な…了解」

「あの、別になにもいらなからさ…良かったらまた遊びに来てよ」

「おお。いいのか？誕生日に俺なんか呼んで…」

「良いから言っただろ…電話してくる」

か…可愛過ぎるだろ…、なんつう良い奴なんだよ園田く。そっか  
…俺の誕生日をわざわざ祝ってくれるとかさ…はあ、切ない。嬉し  
すぎてせつねえ。でもさ、でもさ、これってカップルみたいじゃな  
いか？へへへ…馬鹿か、カップルとか…ありえない妄想だろ。  
あ…もう！！園田マメだよな…園田と付き合っやっはきつと大  
事にされるんだろなあ…いいよなあ。園田にだって触れるし…キス  
とかしたりするんだろな…そりやるよな…付き合ったらするだろ  
普通。はあ…誰かのものになる日がいずれ必ず来るんだもんな。  
そっだよな、高校とかに入ったらもつと過激なアプローチとか受け  
てさ先輩のお姉さんとかがガンガン言い寄ってくるに決まってるあ。

いつまで…そばに居れるかな…

あいつに彼女できても、俺我慢できっかな…

思い出くらい欲しいな。

「出前、7時過ぎに来るって…それまでお菓子食べてよっか」

園田が部屋に戻って来た。またお盆にこんどはカルピスとお菓子でんこ盛り持っている。俺の前の机に置いてふと、俺を見た。目線ががっちりあって…俺はつい…

「園田…キスしたことある？」

「え…ない…よ…」

「俺もない。……………練習してみない？」

「は？」

「いや、だから…彼女できた時、とまどったらカツコ悪いじゃん？だからせつかくだし、練習してみないかと思っただな…」

(ああ…やばい…俺何いつてんだろ…練習とか…そんな…)

「…うん。いいよ、してみよっか…」

「ええっ…!!」

「な…なんだよ、お前がするって言っから…」

園田が真っ赤な顔で俺を睨みつけた。いいって、言っただよ…今、言っただよ…まじで、するよ？だってもうこんなチャンスねえだろ

？俺は園田の細い腕を掴んで自分の方にぐいと引っ張り寄せた。  
園田がもふっと、ソファーに体勢を崩す。真っ赤な顔してでも、目がうるうるして吸い込まれるみたいに俺は顔を近づけて何のためらいもなく園田に口付けた。15歳のキスだ…そんな上手くできる訳ないけど、唇が触れただけでめっちゃくちゃ感じちまう。すぐ唇を離したけど、またすぐに園田に口づける…何度か繰り返して歯がちってあたったり、よだれが垂れて…でも、薄眼明けて園田を見たら、すっごいまじかに園田の目があって頭真っ白になっちまって俺はぐいぐいぐいぐい園田に押し入った。はあはあ…

園田に覆いかぶさるみたいな体勢でキスしまくって、興奮しすぎて二人で息が荒くなつて…それでも園田が全然嫌がらないから、俺調子にのってまたキスして舌いれて…手を園田の服の中に入れて乳首とか触つて…すっげ…気持ち良くて…

ピンポーン！！

びくう！！俺達は二人して飛び上がった。え？俺…何してた…??  
???

「あ…すし…きたみたい…俺とつてくる…」

園田がフラフラ立ち上がって、階段を下りて行った。ドキドキドキドキ胸の動悸が半端ない指が震える。おおおお俺、なんつう事を…園田にしちまったんだー…！！

ああああ…これは、殺されても文句いえない程度には酷い事をしたという自覚はある。なんつう生々しい事を俺はしてしまったんだ…

園田の階段を上がってくる足音が微妙に乱れてる。止まって考え、

また登り、止まって躊躇いまた登ってきてるみたいだ。俺にとっても地獄へのカウントダウンみたいに聞こえる。

でかい寿司桶をもって…園田は部屋に入ってきた。無言で寿司を机に置く。

「た…たべようか…」

「うん」

園田が小皿を渡そうとして、ガシャッと落とした。すっげえ緊張してるみたい…そりゃそうだよな…目の前の人間に強姦されかけたんだから…

「園田…ごめんな…その…お前に彼女ができたら…今日の事は忘れてくれよ…」

俺は俯いたまま園田にそう言った。その日がきたら…俺も忘れるから。園田はしばらく無言で俺を見つめていた。

「忘れない…」

「え？なんで…そんな怖かった？」

もしかして、物凄く園田を傷つけたんだろっか…俺は急に恐ろしく不安になって顔を上げると、真っ赤な顔して涙目の園田が真摯に俺を見つめていた。

「怖くないよ。そうじゃなくて…初めて…好きな人としたキスだから…忘れないよ」

「え？……すき？……俺を？」

「うん」

「まじで？」

「うん」

地獄から天国とはこのことだ！俺は有頂天に達して、園田に抱きついた。園田はびっくりして奇妙な声をだしたけれど、もうそんなのちっとも気にならなかった。

「俺も、俺もずっと園田が好きだった…嬉しい、まじで嬉しい」

「本当に？」

「ああ。本当に…ずっと好きだった」

「染谷…俺も。でも俺の方がずっと好きだったよ」

「え？」

「俺、一年の時から染谷が好きだったんだ。お前、覚えてないかも  
しんないけど…一年の時球技大会、バスケットで対戦したんだぜ。染谷  
…めっちゃくちゃ上手くてさ…ずっと目で追ってるうち…好きになっ  
てた」

「そっか…はは、めっちゃめっちゃ嬉しい。バスケット選んで良かった。ソ  
フトと迷ったんだ…お前に出会えてよかった」

「うん。クラス一緒になって、隣の席になって…染谷が話しかけてくれて俺もすごく嬉しかった」

俺達は抱き合ったまま、また唇を合わせた。今度はもう、いつか来る別れを気にしてのキスじゃない…ずっとこれから一緒にいる為の誓いのキスだ。園田の前髪が俺の額にあたってくすぐりたい。思ってた通り柔らかい髪…良い匂いがする。

今日を忘れない。忘れられない。初めて大好きな人とキスをした日。俺達の最高の記念日だ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4168u/>

---

その日がきたら忘れてくれよ

2011年10月8日19時29分発行